

テキスト音読に見られる発音上の問題点

—句切りを中心に—

The problems with pronunciations found in the text reading aloud

山中 都

YAMANAKA Miyako

早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-1

Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University: qyh02373@nifty.com

Abstract : In this research, investigation on the text reading aloud was made among the learners of Japanese as a second language and the problems with pronunciations are mainly reported. From the voice data obtained by the investigation, the positions of pause and errors of reading were classified according to the hearing judgment. As the results, the variation of the reading aloud speed, the inappropriate positions of pause, and the increase of the number of rereading were found depending on the levels of Japanese. Especially in the beginners' level, the problems of pause appeared notably.

キーワード：音読、句切り、文の意味、読み直し、初級レベル

1.はじめに

読解の授業時の「音読」について、茂住・足立(2004)は学習者のレベルに関係なく現役日本語教師の約90%が実施していると報告している。その目的は、文章の意味理解のみならず、音声面に関する効果も期待している。例えば、学習者に発音の正誤を自主的に気付かせたり、文構造を意識させたり、日本語の滑らかさや音の響きやリズムを繰り返して身につけさせたりすることができると考えている。

2.問題と目的

音声指導における「音読」の効果を客観的に評価するためには、学習者の「音読」の実態を明らかにすることがその第一段階である。そこで、本稿では日本語学習者が通常授業で行う「音読」を想定し、文章の意味を理解した上で音読した場合に、どのような発音上の特徴があるのかを明らかにする。特に、意味の理解との関わりを見る上で重要な句切りの特徴を聴覚印象よりまとめる。さらに音読時に起こる読み間違い、読み直しについても整理し、指導の際に留意すべき点も検討する。

3.調査方法

調査は、都内の日本語学校で学習する日本語学習者14名に実施した。音読の録音は、学習者の所属する機関で実施し、調査協力者のレベルを測定する基準として OPI(Oral Proficiency Interview)を用いた。

今回の調査の手順は以下に記すとおりである。

①筆者を含め OPI テスターの資格を持つ日本語

教師が OPI を実施した。

②音読文は初級学習者も短時間で意味を理解し、音読できるように『みんなの日本語』L44 の読解文『結婚式のスピーチ』を使用した。(下記参照)

結婚式のスピーチを頼まれたことがありますか。スピーチは長すぎると、みんなに嫌がられます。また、短すぎると、お祝いの気持ちがうまく伝えられません。難しいですね。練習しておいても、大勢の人の前に立つと、なかなか上手にできません。話の順序をまちがえたり、忘れてしまいます。話の大切な所をメモしておく、安心です。できるだけやさしいことばや表現を使うようにします。難しいことばは覚えにくいし、まちがえやすいからです。それから、使ってはいけないことばがあります。例えば、「別れる」とか「切れる」とかです。これらは縁起が悪いので、使いません。気をつけましょう。(実際のシートにはルビあり)

音読文シートを調査協力者に渡し、5分間練習した後に1回音読する。マイクは単一指向性マイク(SONY ECM-957)を用い、録音機(DAT: SONY TCD-D100)で録音した。

③調査協力者に対し、アンケート及びフォローアップ・インタビューを実施した。

調査協力者の国籍の内訳は韓国(以下 KS)11名、ドイツ(以下 GS)1名、スリランカ(以下 SS)1名、ミャンマー(以下 MS)1名であった。また、OPI判定の結果、レベルの内訳は、上級(Advanced)2名、中級(Intermediate)10名、初級(Novice)2名であった。詳細は表1に示したとおりである。

表1 調査協力者の OPI 判定結果

調査協力者	KS1	KS2	KS3	GS1	KS4	KS5	KS6	KS7	KS8	KS9	KS10	KS11	MS1	SS1
OPI判定	A-H	A-L	I-H	I-H	I-H	I-M	I-M	I-M	I-M	I-M	I-L	I-L	N-H	N-L

*表中の A・I・N はレベル、さらに各レベルの中で、H(High)、M(Middle)、L(Low)と下位分類される。

4.結果と考察

今回の調査実施場所（教室）では、音響解析が可能な品質の音声資料の収集を行うことができなかったために、聴覚印象による分析のみを行った。分析の観点とは、以下の通りである。

- 句切りの数
- 不自然な句切りの位置
- 読み直し回数

図1を見ると、OPI判定結果により初級レベルと判定された2名の音読は、句切りも多く、不自然な位置で句切る頻度が急激に上がる。また、そのことにより、何度も同じ箇所を読み直す結果となった。

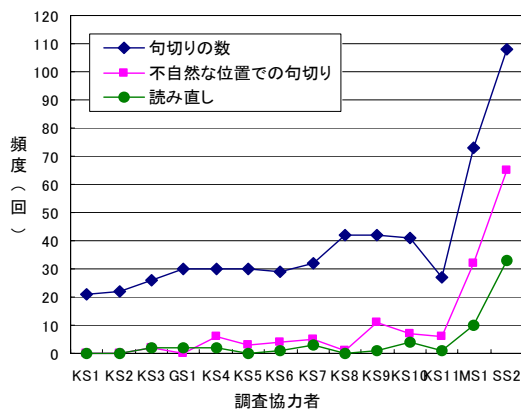


図1 調査協力者の音読の特徴

OPIで上級レベルの学習者は、まとまりをもった文章単位での発話が可能であるため、音読も意味のまとまりで句切り、聞き手に伝わりやすい音読ができると考えられる。しかしながら、中級の場合は、初級レベルに近いほど、文の意味を考えながら音読するため、KS9、KS10、KS11、MS1、SS1では、音読速度が遅くなるという現象も見られた。また、「えん/ぎ/が」のように単語内の音節ごとの句切れ、「悪いので」のように活用の影響での句切れ、「お/祝いの」のように接頭語の後での句切れ、「ことば/は」のような助詞の前の句切れ、「覚え/にくい」のような複合語内での句切れなどは、聞き手には伝わりにくい要因となる。このような音読になるのは、文の意味のまとまりを理解する以前に、一字一句辿りながら読んでいる段階である。辿りながら読んでいく過程で、意味が理解できた時に、まとまりのある読み直しを行うこともある。

次に、学習者自身が黙読時と音読時に実際に意識していることについてアンケートとフォローアップインタビューを実施した結果について、表2にまとめた。表内の「1」は、「意識があった」

表2 黙読時と音読時に意識していた点(調査総数14名)

	KS1	KS2	KS3	GS1	KS4	KS5	KS6	KS7	KS8	KS9	KS10	KS11	MS1	SS1	計
黙読段階	単語の読み方		1		1	1	1			1	1	1	1	1	9
	ことばの意味	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
	アクセント			1				1				1			4
	イントネーション							1						1	2
	文の形	1	1				1	1	1	1		1			7
	文の句切り		1	1			1	1		1	1			1	7
	文の意味	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13
	文と文の意味のつながり	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
	筆者の主張	1	1		1			1	1	1	1	1	1	1	9
	単語の読み方	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
音読段階	ことばの意味						1							1	3
	アクセント	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13
	イントネーション	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
	文の形	1	1				1	1					1	1	6
	文の句切り	1	1	1	1	1	1				1				6
	文の意味	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	9
	文と文の意味のつながり	1	1	1	1	1	1	1	1						6
筆者の主張	1	1					1	1	1					4	

と学習者自身が回答したものである。これによると、レベルに関係なく、黙読時には、言葉の意味や文の意味などに注意を払っている。その反面、文の意味と関わりのある「文の句切り」については、半数が意識していない。また、アクセントやイントネーションへの意識も働いていない。一方、音読時には、アクセントやイントネーションへの意識が全体的に高まっているが、不自然な句切りをしていたKS9、KS11、MS1、SS2では、どこで句切るかが意識されていないことが分かる。その反面、言葉の意味や文の意味に意識があることから、文字を目で追った音読となり、その結果として相手に意味が伝わりにくくなったと考えられる。

5.まとめ

テキスト音読を行う際には、学習者は文の意味について考えているものの、句切れや修飾関係には意識が向いていないことが分かった。特に初級レベルでよく見られるような不自然な句切りが多い場合には、聞き手にも分かりやすい音読を行うために、文の構造や意味をしっかりと捉えさせることが必要だと考える。

したがって、テキスト音読では、教師が事前に教科書の記載形式や、構文などを確認しておくこと、さらに意味のまとまりを把握させることで、効果的な音声指導の一助となりうるであろう。具体的な実践は今後の課題としたい。

【参考文献】

石崎晶子(2004)「作文音読における初級学習者のポーズの特徴 英語母語話者4名の縦断的資料をもとに」『第二言語としての日本語習得研究』7, 第二言語習得研究会, pp.26-44

茂住和世・足立尚子(2004)「クラス授業で行われる音読に対する教師の目的意識—外国人学習者に対する日本語教育の現場での調査から」東京情報大学研究論集 Vol.8, No1 PP.35-44